

制作概要

「芸術作品の本質的な性質は調和である。造形作品においてはそれは光から生まれる。光は、際立たせ、装飾する。」とはアントニ・ガウディ (Antoni GAUDI 1852-1926)¹⁾の言葉である。

近年自身のテーマとしている『「光」の作用によるモノの変容』について、モノとそれが存在する空間・光との関係に深い関心を持ち、「光」の作用による表面の触覚的・視覚的変容について、モノそれ自体が空間に存在する立体としての表現を中心に制作活動を行ってきた。

立体表現の場合にはモノ(作品)にあたった、あるいはあてられた物理的な「光」を見る。モノの輪郭が際立ち、また溶け込むといった「光」の作用の呼応や調和を、どのように表現していくのか。自分自身にとっては空間に存在する形を創っていく上で「光」が生み出す手触りや量、時間は切っても切り離せない。

一方平面表現においては画面上に定着された(描かれた)、作り手の意図した「光」を見ることになる。

今回の制作では、時間軸を超えた感覚、「確固として存在するものではなく、不完全で固定されず、移ろう像」²⁾としての「光」の表現を目指し、平面＝絵画に置き換えることを試みた。

『Veratrum』『光・容』^{かたち}はいずれも植物をモチーフとしている。光が与える表面への視覚的効果を重要視し色彩・マチエール・

質感を大事にしながら、制作を進めた。

立体表現においては「容」を持ったモノ^{かたち}が存在するがゆえに「光」の在り方は具体的に時間や場所、形態そのものが大きく影響する。一方平面においては、今回の制作を通して、文化や社会といった象徴的な在り方が強く印象付けられると感じた。

今後も表現の領域を超え、あるいは行き来しながら様々な「光」の在り方を注意深く観察し、自身の「光」に対する感覚を研ぎ、「光」の捉え方について新しい拠り所を探っていきたい。

引用文献

- 1) 入江正之 「もっと知りたいガウディ 生涯と作品」 株式会社東京美術 p30 2014
- 2) 丸山直文 「絵画[アートとは何か] わたしの絵画」 武蔵野美術大学油絵学科研究室編 武蔵野美術大学出版局 p 086 2002

辻本 恵

『Veratrum』『光・容』

京都市立芸術大学美術教育研究会会員

双線美術展

ギャラリー吉象堂

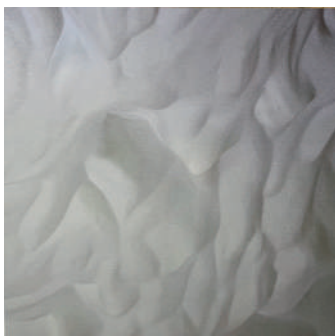
2024年9月17日～9月22日



Veratrum アクリル・色鉛筆・パネル 520×730mm 2024

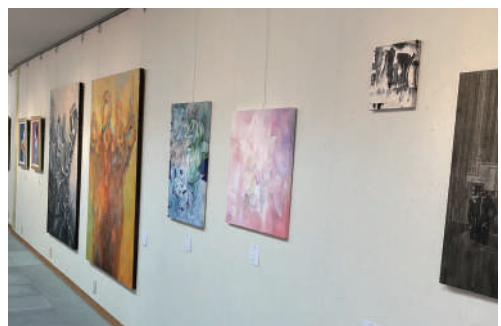


光・容 アクリル・色鉛筆・パネル 600×595mm 2024



参考作品(立体・部分)

HaKobu はこぶ 滑石・塗料 200×500×40cm



双線美術展会場展示風景